

## 男性のパワー、競争

坊隆史 松本健輔

先日、10代～20代の男性たちに“男らしさ”について尋ねてみた。すると「力が強い」、「たくましい」、「社会的に成功している」といった回答が返ってきた。こうした伝統的な男性役割規範は、現代の若者たちにも浸透しており、ステレオタイプとして社会に強く根づいているようだ。今回はこうした伝統的な“男らしさ”に影響を与えている「パワー」や「競争」について考えてみる。

パワーを辞書で調べると、①「力、能力、体力」、②「権力、支配力、軍事力」、③「政治や社会を動かす集団の力、勢力」、④「馬力、動力、仕事率」といった意味がある（小学館『大辞泉』参照）。いずれの意味でもステレオタイプに即した“男らしさ”に関係している。高橋と湯川（2008）は「“男らしさ”は支配と権力に象徴される他者への『優越性』を増大させ、維持する特性」であると述べ、「男性たちの生き方を勝者になるための人生レース」と表現している。現代日本の男性たちは、学校教育の中で学歴競争（あるいはスポーツやその他文化的活動）が繰り広げられ、次に就職活動という競争を乗り越えて希望の仕事に就くことができたと思った途端、勤務先でも出世競争が続く。競争に勝つことで権力というパワーを手に入れることができるが、そのためには体力や能力、競争に参加する動力（意欲）が求められる。競争に勝ち続けていられる場合、とくに問題はないが、いったん競争のラインから外れてしまった場合には、葛藤、緊張、ストレス、不安などによってメンタルヘルスを損なう（鈴木、2008）こともある。

男性たちは自身の生き方だけでなく、日常生活の中でもパワーや競争に直面

している。自覚せずに生活していることもあれば、葛藤を抱えて悩んでいることもある。今回は「え、そんなことで競争するの？」というケースを紹介したい。なぜなら、ごく当たり前の日常で競争が繰り広げられていることをお伝えしたいからである。ケースは事実改編を加え、個人情報特定されないようにしている。

### <薬も競争>

精神障害者施設の利用者のA氏とB氏。普段は仲良く接しているが、どちらかが何かの自慢を始めると、もう一方が対抗してしまう。貯金額、友人の数、食事の量 etc…。彼らは自分の病気に関してまで競争する。この時は処方されている薬について競争を始めた。

A氏「自分は〇〇（薬の名称）を飲んでいる」

B氏「自分はそれじゃ効かないから△△を処方してもらった」

A氏「それは以前、×錠飲んでいた」

B氏「いや自分は×の2倍飲んでいる」

慢性的な精神障害を抱えているA氏とB氏にとって、障害は彼らのアイデンティティの一つともいえる。処方されている薬も同様である。彼らの健康維持にとって重要な薬に対して競争原理が生じたと考えられる。本ケースの場合、2人には一定の信頼関係があり、競争は相互交流として機能している面もある。仲の良い友人との交流にも競争原理が働きパワーを示そうという点が“男らしさ”の特徴であろう。

### <父親に勝ちたい>

中学2年生のC氏。父親に勝ちたい。とくに昔から習っている武道で父親に勝ちたい。父親は地域でその武道のコーチもしていて一目置かれている。一度も父親に勝ったことがない。何度挑戦しても勝てない。武道で勝つのはまだまだ時間がかかる。腕相撲や走力など身体面だけでなく、学力でも敵わない。どうしても父に勝ちたいC氏は食事の早食い競争をもちかけたものの、接戦の末に負けてしまった。今もC氏は父親を乗り越えるために日々武道の練習に精進している。

息子が父親を乗り越えようとする行動は、エディプス・コンプレックスの概念（詳細は精神分析学に関する他書を参照して頂きたい）で説明されるようにごく一般的である。しかしC氏のそれは過剰である。C氏にとって、文武両道だけでなく地域でも貢献している父は尊敬すべき目標なのであろう。こうした敬意と憧れの気持ちが「父に勝ちたい」という形で表出している。尊敬しているものに勝って乗り越える。こうした親子関係は母娘関係には少なく、“男らしさ” 独特のものといえよう。

いかがであっただろう。紹介事例は特殊なものと感じられたかもしれない。確かに職場の出世競争や女性との関係性などのテーマの方が明瞭であろう。しかし、あえて上記事例を紹介した。なぜなら、ごく身近な日常にパワーや競争が関与しているということを強調したかったからである。パワーや競争心は、心身に健康な成人期の男性だけでなく、年齢や立場に関係なくあらゆる男性たちに、様々な形で表出される。それが男性たちのある種の生き難さを表現しており、面白くもあり悩ましいところでもある。こうした男性独特の傾向を知っておくことは、援助者にとって男性問題を支援する際の助けとなるであろう。

今回は伝統的な“男らしさ”の基底にある男性のパワーについて、男性相談でみられる典型事例を通して考察してきた。この連載も10回目を迎えたが、暴力や職場のメンタルヘルスなど、まだ取り上げていないテーマは多くある。こうしたテーマはより一層、男性性のパワー構造が機能していることが多い。筆者らの力不足ゆえ、うまく男性問題を言語化しきれていないが、男性援助者の視点から思うことをお伝えしていきたい。

文責：坊 隆史

#### 参考文献

- 高橋恵子・湯川隆子 2008 ジェンダー意識の発達 柏木恵子・高橋恵子（編）  
日本の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題 有斐閣
- 鈴木淳子 2008 男性性とメンタルヘルス 柏木恵子・高橋恵子（編） 日本  
の男性の心理学—もう1つのジェンダー問題 有斐閣